

第一〇章・ナワガイへの行軍

土地の性質に関して入手できる地図や情報を検討した後、ピンドン・ブラッド卿は二つのルートでモーランド族の地に入ることを決めた。(一)第三旅団はナワガイ峠を経由する。(二)第二旅団はランドバト峠を越える。これによって地域をより徹底的に掃討することになり、補給にさらなる利便性がもたらされることになる。第三旅団の踏破する距離が長いため、第三旅団は第二旅団を追い越し、九月一二日に一二マイルを行軍してシユムシユクに到着した。これまで先を行っていた第二旅団は七マイルの楽な行程でジャーまで移動し、支援距離内でキャンプをした。

司令部スタッフは第三旅団に移り、彼らと行軍した。最初の五―六マイルは騎兵隊が前に偵察していた道路であった。再び、全員が谷のウトマン・ケル側にある多数の城に感銘を受けた。多くの熱血漢は立ち止まって、この素晴らしい場所のいくつかを爆破したいと思ったことであろう。しかし政府の協約は守られ、縦隊はゆっくりと通り過ぎた。白と青を装い不機嫌な軽蔑の色を浮かべたその防御者が守る砦を見つめながら。

数時間騎行した後、スタッフは澄んだ急流の岸の木陰で朝食をとった。

私たちは二〇〇ヤード離れた水の上にじっと座っているコガモの大きな群れを見た。誰もが興味を持った。たくさんのライフルがあった／＼しかし、猟銃はどこにあるのか？厳格かつ迅速な検索が行われた。相談を受けた軍の政務担当官デイビス氏は、やがてショットガンを持っている友好的なカーンを見つけた。さらに時間がかかった後、この武器が持ち込まれた。コガモはまだ平気で水に浮かんでいた。猟銃は危険の感覚を目覚めさせなかった。彼らは谷でたくさんの射撃音を聞いていたが、通常は鳥に向かって発射されたものではなかった。エキサイティングな瞬間が到来した。誰が撃つべきか？責任は大きかった。大勢が断った。ついにマン獣医大尉―数日後にナワガイで負傷した―が志願した。彼は銃を取り、苦勞して忍び寄った。彼は注意深く這って行った。私たちは感情を抑えながら見つめていた。突然二初の銃声が鳴り響いた。それが最初であり、その後によくが続いた。二〇〇ヤード離れた行軍縦隊の兵たちはすっかり目が覚めた。コガモの群れは急上昇して飛び去ったが、死傷した四羽が後に残された。私たちがこの鳥たちを拾い上げたときの満足感が間違っていないかったことは、その日の夕食での彼らの素晴らしさによって完全に証明された。

さらに一マイルほど行くと約三〇ヤード幅のワテライ川であった。これはジャンドル川へと流れ、そこからパンジコラ川に流れ込むのである。これを越えて対岸に上がると、軍はおそらく幅一〇マイル、長さ一六マイルほどの広く平らなカル高原に出た。高い土地に

立てば、谷の規模の大きさが明らかになった。東（*原文では西）を見渡せばパンジコラの背後の丘、以前のキャンプ地、そしてジャンドルに付属する谷の入り口が見えた。正面の奥の端には、山岳地帯の開口部にナワガイの峠があった。左側にそびえ立つのは、コ・イ・モールの大山塊、別名「孔雀山」である。壮麗な峰で、高さは約八〇〇〇フィート、その頂上はペシャワルとマラカンドの両方から見える。その名前はおそらく訛りである。アリアン（*アレクサンドロス東征記の著者）はメロス山と呼んでいる。その麓に以前はニーサ市が立っていたが、他の多くの都市と同じくアレキサンダーの武器の前に跪いた。その住民は、平和を懇願し、政治を「憲法」によって行い、「インドの他の地域では成長しなかったツタがここでは成長した」と自慢した。都市、ツタ、憲法はともに消滅した。山だけが残っている。少し北へ目を移すとラムラット峠が見える。右側ではなだらかな平野が丘陵地帯に流れ込んで見えるように見え、直径約一二マイルのほぼ円形の広い山ふところが谷に開いている。顕著な支脈が丘から流れ出て、海の湾と入り江のような、多くの暗い溪谷と深い窪みを形成している。入り口の幅は大体一マイルであった。私が最初に谷を覗いたとき、通り過ぎる嵐の黒い雲が全体に暗く垂れ下こめていて、外の輝く太陽光とは対照的に、もやのかかった薄明かりがそれを満たしていたことを覚えている。それはワテライ、あるいは後に私たちがマムンド溪谷（*モーマンドとは別）と呼ぶ地であった。

カルのカーンは川の向こう岸で將軍に会った。彼は、明るい目、ふさふさした黒いひげ、白い齒の、背が高く見栄えの良い男で、常に笑顔を見せていた。彼は豪華な服を着ており、十数人の騎手を従えて、ハンサムではあるが御しくいこげ茶色の馬に乗っていた。彼はビンドン・ブラッド卿を優れた敬意と礼儀をもって迎えた。カーンはパシユトウ語しか話さないで、政務担当官を通じていくらかの会話が行われた。カーンは自分と隣人であるジャーのカーンの忠誠心を力説した。部隊の平和的な通過を安全なものにするためにできる限りのことをするつもりである、と言った。部隊が必要とする物資は、自分の力が及ぶ範囲では自分が提供するであろう。彼は行軍する兵士と動物の長い列を心配した。將軍は彼を安心させた。部隊が干渉されたり抵抗されたりしなかったならば、夜間にキャンプに発砲がなかったならば、遅れた兵が彼の領民に殺されたり傷つけられたりしなかったならば、徴発が必要なすべての穀物と木材に対して現金で支払いを行うであろう、と。

カーンはこの約束を感謝と安堵で受け入れ、以後ナワガイとマムンド溪谷で行われた作戦中、忠実で名誉ある行動を保った。その力を最大限に發揮して血気盛んな若者を抑えた。他の部族が反乱に参加するのを思いとどまらせるために、できる限りその影響力を使った。配下の見張りが毎晩私たちのキャンプを監視し、その結果疲れた兵士たちは長く良く眠ることができた。戦いの終わりには政府とマムンド族の仲介をした。それは到底任せられるものではなかったが、彼はあるとき注目すべき奉仕を申し出た。第二旅団で兵力と弾薬筒がほとんどなくなった時、郎党とともに弾薬輸送隊を護衛しようというのである。この段

階で彼が裏切っていたなら最も重大な結果になったかもしれない。しかし領民の反発と隣人からの復讐の脅しにもかかわらず、彼は最初から最後まで将軍との約束を守った。

彼の方では英国の誠実さについて不満はないであろう。戦闘が一月近くこの地方で続けられたが、領有する村の一つも焼失することはなく、その作物が受けたすべての損害は気前よく補償された。彼は報復を受けないことを保証されていた。そして作戦の終わりにかなりの金銭が贈られ、サーカーは敵を罰すると同じく、友に報いることができる、ということを経験して証明した。

第三旅団のラクダ輸送は道中で遅れ、長い行進で疲れていた兵士たちは荷物が来るまで、炎天下にシェルターなしで数時間待たなければならなかった。ようやくそれが到着すると、私たちはテントなしで可能な限りのキャンプをすることにした。毛布、棒で支えた防水シート、あるいは隣接する木の緑の大枝から即興のシェルターが作られた。これらの貧弱な覆いの下に兵士たちが横たわって夕暮れを待った。

誰もがインド反乱期間中に暑い気候の中を遠征しなければならなかったイギリス軍の苦しみを知っている。この谷の九月はそれを容易に想像したり、簡潔に説明したりできるほどの暑さであって、病院報告書が示すように太陽への曝露が英国の大隊にはひどく堪えていた。もちろん反乱の後、兵士の服装と装備に多くの有益な変更が加えられた。不十分なパガリー（*帽子の周りを一周する布）のついた小さなキャップは、長い上掛けの覆いで陰が増えたピス・ヘルメット（*防暑帽）に代わっている。高い飾り襟と厚くてタイトなユニフォームはなくなり、クールで快適なカーキ色の服装に代わっている。脊椎プロテクターが背中を覆い、また他の方法で合理的な改善が行われている。しかし太陽はそのまま変わらず、全ての予防策は最小限に過ぎなかったため、その弊害を防ぐことはできなかった。

時間がゆっくりと過ぎる。暑さは強烈である。エンジンの煙突の上で見られるように空気が焦げた平野の上で輝いている。猛烈な暖気の風が吹く。そして安らぎをもたらすことなく、ただホコリの旋風を巻き上げるだけである。それはシェルターを四散させて中いる者を半ば窒息させる。水はなまぬるく、のどの渴きを癒すことはできない。太陽が西の山に向かって沈むにつれて、ようやく影が長くなり始める。全員が生き返る。動物たちでさえも全体の安堵感を共有しているように見える。キャンプの人々は日没を眺めるため外に出て、夕暮れを楽しむ。私たちの心からは日の天体に対する殺伐とした憎しみの感情が消えており、それが翌朝五時から再び自分たちを苦しめようとしていることを忘れるよう努めている。

マラカンド野戦軍がモーマンド地方に入るまでに数日間の余裕があるため、ビンドン・ブラッド卿は両旅団に一三日は停止したままにいるよう命じた。第三旅団はシムシユクに、第二旅団はジャーに。その間に二個偵察隊が送られた。一つはランバト峠の頂上へ、もう一つはワテライ溪谷の上方へ。

モーマンドへの前進が始まって以来、初めて「狙撃」を受けたのが一二日の夜であった。キャンプに向かって約半ダースの弾が発射されたが、眠りの浅い者の邪魔をしただけであった。しかし、それは始まりを告げていた。

翌朝、偵察隊が出発した。將軍はランバト峠に向かう一隊に同行した。その向こう側の未踏破の土地の性質を自ら確認するためである。歩兵の二個中隊は道を開くよう、他の二個中隊は峠の途中まで支援を続けるよう命じられた。ビンドン・ブラッド卿は六時に出発した。派手な槍旗に司令部のユニオンジャックを結びつけ、景色に色味を加えた護衛が従った。数マイル騎行した後、私たちは歩兵隊に追いつき、停止しなければならなかった。彼らを先に行かせて荒れた路面をきれいにさせなければならなかったのである。さらに一マイル先では下馬して徒歩で進まなければならなくなった。現地人の態度と振る舞いは最も非友好的であったが、抵抗はなかった。若者たちは丘に引き下がった。年長者は私たちを睨みつけ、罵りさえしたがそれにとどまった。村の墓地はあらゆる種類の財産、ベッド、水差し、穀物の袋でいっぱいであった。住民は私たちが略奪を望んでいるのではないか、そして神聖な場所であれば安全なのではないかという二重の妄想の下にそれらをそこに置いたのである——というのが私たちの見解であった。彼らは不機嫌な顔つきをしていたが、ついに皆立ち上がって恭しく敬意を表することになった。

登山には骨が折れ、少なくとも一時間かかった。しかし、通り道はどこでも通行可能であり、あるいは簡単にラバの通行が可能になりそうであった。ジャングルでの長年にわたるあらゆる種類の狩猟によって鍛えられ、強化されている將軍が最初に頂上に到着し、続いてウォードハウス准将と息切れたスタッフが続いた。アンバサー溪谷の素晴らしい景色が広がった。それは乾燥した様相を呈していた。たくさんの村が見えたが、水の兆候はなかった。これは深刻な問題であった。井戸に関する情報が信頼できなかったため、谷の未知の危険の中に部隊を突入させる前にいくらかの貯水槽と小川を確認できていることが望ましかったのである。いくらか検討した後、ビンドン・ブラッド卿は元の計画を修正し、第二旅団の二個大隊と一個戦隊だけに峠を越えさせ、残りは彼とナワガイで合流するために行軍することにした。その後、私たちは戻り、昼食に間に合うようにキャンプに到着した。

一方、ワテライまたはマムンド溪谷の偵察はより興味深い性質のものであった。ピート

ソン少佐指揮下の第一ベンガル槍騎兵隊の二個戦隊と政務担当官のデイビス氏が合意した協約を実行させるよう、マムンドに圧力をかけるために派遣されていた。彼らは五〇丁のライフルを引き渡すと約束していた。しかし今、それを行う意志をみせていない。彼らは旅団が地域を行軍しているだけであって停まっている時間がないことに気づいていた。そして自らの武器をできるだけ長く保持することを決意していた。

騎兵隊が最初の村に近づくと、約三〇〇人の男たちが集まって旗印を見せ、槍騎兵に停止を求めた。口論が続いた。女性と子供を移動させるための三〇分が与えられた。その後、戦隊は前進した。部族民はまだ威嚇しつつ、丘に向かってゆっくりと引き下がった。それから小さな一団がやってきて、ビートソン少佐に隣の村にスワット溪谷の戦闘で捕らえられた軍馬がいることを知らせた。マムンド族がマラカンドへの攻撃に関係していたというこの自白は、十分にナイーブであった。騎兵隊は村へ騎行した。馬は見つからなかったが、最初の村の差し出がましい情報提供者は、馬が繋がれていた場所を熱心に指し示した。この情報の結果として、そして部族民に元の協約の実行を促すため、デイビス氏は見せしめを決心し、ビートソン少佐に馬を盗んだ者の家の破壊を許可した。これはその通りに実行された。煙が上がり始めるやいなや半マイル離れたところで待っていた部族民がマティール・ヘンリー・ライフルで騎兵隊に弾の雨を降らせた。しかし交戦するつもりはなく、速歩で退却した。彼らは追跡され、銃でよく狙われたが、正確な射撃には射程が長すぎたため弾丸は頭上で無害のまま口笛を吹いただけであった。

槍騎兵隊が谷を去ると、先の章で述べたことを例証する事件が起こり、それは現地人の日常生活に特有のものである。最初の村の人々は、騎兵隊の注意を二番目の村に向けた。二番目の村の一部は結果として焼かれた。双方の住民はこの件をライフルで論議することになり、その夜最後に見たときには活発な小競り合いをしていた。しかし、どうやらすぐには争っていたことを忘れたらしい。

騎兵隊が発砲されたという噂は彼らがキャンプに帰り着くより先に広まっていた、そして、何らかの対抗措置がとられる見通しはどこにおいても満足をもって歓迎された。多くの人々がモーマンド遠征は単なるパレードであり、部族民はそれに従事している強力な軍隊に圧倒されていると考え始めていた。彼らはまもなく真実を悟らされることとなった。私は戦隊が戻ったのを見た。その背後でマムンド溪谷は夕闇と一日中その上にかかっていた重い雲ですでに暗くなっていた。彼らは大いに喜んでいて。撃たれたのに何の損害もないことほど、人生において爽快なことはない。スワールは鼻高々で馬に座っていた。若い将校の何人かはまだ興奮で頬を紅潮させていた。しかし彼らは見事にこの件についてすべて忘れてしまったかのように振舞った。彼らは数人の輩が彼らを「狙撃した」と信じた／それがすべてであった。

しかし、決してそれがすべてではなかった。何であれアフガンの「血火の十字架」(*スコットランド高地氏族が人を戦争に召集するのに用いた)に相当するものが各部族の間を巡っていた。その夜は攻撃するために集まる時間がなく、開けた土地のキャンプは夜の銃撃には向いていなかった。他の旅団が近づいて来ていた。待つことになった。そこで彼らは時折銃撃するだけに甘んじた。それは私たちが夕食をとっている間に始まり、朝の光が差すまでとぎれとぎれに続いた。負傷者はいなかったが、ヌラーの周りをうろついたり、時々発砲したりすることに夜を費やした部族民は、翌朝戻って自分たちのしたことを同胞に自慢したと想像できる。「お前たちがみな夜中、暗闇の中でまどろみ、眠っている間、俺は、俺ですら、一人で呪われた者たちの陣営を攻撃し、サヒブを殺した。そうじゃないかね?兄弟。」すると兄弟たちはいつかその嘘が実証されることを期待しながら、間違いないかそうであり、彼こそが部族に貢献している、と答える。それが「狙撃者」の褒美であった。

翌朝早くに第三旅団と第一一ベンガル槍騎兵隊の三個戦隊がナワガイに移動し、抵抗を受けることなく峠を通過した。將軍と司令部スタッフが彼らに同行した。そして私たちはその向こう側にベドマナイ峠をはっきり見ることができ、広くて大規模な谷の中にいることに気づいた。きた。ここでようやく私たちはモーマンド族の意図についての確かな情報を得た。さらなる前進を阻止するために、ハツダ・ムラーと一〇〇〇人の部族民が集まっていたのである。結局のところ、戦闘になるであろう。夕方、ビンドン・ブラッド卿は騎兵隊の一個戦隊を率いて峠へのアプローチと土地の全体的な地形を確認するために出かけた。戻ると同時に彼は一八日に強行する、とインド政府に通信した。兵士、特にまだ交戦したことのないイギリス軍は来るべき戦闘を熱く期待した。しかし、ことの成り行きは別の経過を辿ることとなった。

私たちが偵察から戻ったときにはすでに夕暮れだった。夜は楽しかったし、屋外で食事をした。それでも谷はとても暗かった。山々はピロードのように黒かった。やがて月が昇った。その神秘的な光が急速に谷間に溢れたのだが、私は景色の美しさを描写したい気持ちを抑えることにする。すべての適切な単語はおそらく多数の作家によって何度も使用されてきたし、無数の読者によって読み飛ばされてきた。実際にこれらの手の込んだ説明は、それを見たことがない人には何も伝えることはなく、見たことがある人には不要であると私は考えるようになった。自然は代理人によって賞賛されるものではない。しかし戦時、特に辺境戦争においては誰でも月の重要さを痛感する。「今夜は何時に昇るのか?」という質問が繰り返される／他のこと―攻撃、「狙撃」、突撃―のために。他に潮の干満もその動きに影響を受ける。

一方、ナワガイの平和なキャンプの静かな夕食中に私たちは「銀色の乙女」(*初雪)が

東の山々に速やかに現れるのを見た。彼女は一マイル離れた別のシーン、私たちが去った谷を凝視していた。

第二旅団はその朝、ジャーからランバト峠のふもとまで行軍した。翌日にはそれを通過しようとしていたのである。ジェフリーズ准将はこの行動を見越して、バフ隊をコタルを保持するために派遣し、残りの部隊とともに麓でキャンプをした。夜明け前の前進を目的として採られたキャンプの立地は、敵の接近に好都合であった。地面は荒れ、多数の小さく曲がりくねったヌラーが交差し、岩が散らばっていた。ただし、他の場所にするなら翌日に長い行進が必要であった。攻撃がありそうとは考えられていなかった。

八・一五に、将校が夕食を終えようとしていたとき、静けさの中に三発の銃声がした。それは合図だった。たちまちヌラーからガイド歩兵隊の区画の前面への活発な発砲が始まった。弾丸はキャンプ全体にうなりを上げ、テントを裂き、動物を殺し、傷つけた。

ガイド隊は着実に銃火を返し、テントの列の前に掘られたシェルター塹壕が他の部分よりも高かったため、将校も兵も被弾しなかった。一〇時、敵のラツパ手が「退却」を吹き鳴らし、銃火は少しの落下弾のみとなった。全員が事件の終了を祝福していた一〇時三〇分、第三八ドグラ隊が占めるキャンプの反対側で活発な攻撃が再開された。主にマティーニ・ヘンリー・ライフルで武装した敵は、塹壕から一〇〇ヤード以内まで忍び寄っていた。これらの高さはわずか一八インチであったが、兵士を十分に守ることができた。将校は危険を顧みない見事な態度で、惜しげもなく身体をさらした。光り輝く月明かりの下を平然と上へ下へと歩くため、彼らは絶好の目標であった。准将は銃撃を制御し、弾薬の浪費を防ぐために、キャンプの脅かされている側へと出向いた。しかし、何千発も発射したにも関わらず大きな成果は得られなかった。砲兵中隊は数発の照明弾を発射した。地面が非常に荒れていたため、それによって明らかになったものはほとんどなかった。しかし部族民はその匂いを毒ガスだと思つて警戒した。将校は物陰で身を守るように指示されていたが、ことづてを伝え、銃撃を規制する必要があるため、かなり多くの曝露の機会があった。そして塹壕の上に現れたすべての人にとって危険は大きかった。第三八ドグラ隊のトムキンス大尉は心臓を撃たれ、数分後、連隊の副官ベイリー中尉も殺された。間に合わせて作られた大雑把な箱型シェルターの救護所にこれらの将校を連れて行くのを支援する際、ドグラ隊付属の将校であるハリントン中尉が頭の後ろに弾丸を受け、それが脳を貫通して負傷し、その後死んだ。すべてのテントが攻撃を受け、穀物袋やビスケットの箱でできる限りの遮蔽物が配置された。二・一五に発砲は停止し、敵は戦死し、負傷した仲間とともに撤退した。彼らは丘から離れたところで日の光に出くわす気はなかった。しかし彼らはすでに少し長居しすぎている。

明るくなるやいなや、コール大尉の指揮する騎兵戦隊が追跡を開始した。谷を長く全速力で駆けた後、山へ向かう一団に追いついた。彼はすぐに突撃して、岩に到達する前にそのうちの二人を槍で貫くことに成功した。その後、戦隊は下馬してカービン銃で発砲した。しかし、部族民はすぐに向きを変え、隊の馬の方向に突進した。一人のスワールが負傷し、数頭の馬が殺された。急所を脅かされた騎兵たちは、急いで駆け戻り、自分の鞍に乗るのに辛うじて間に合った。馬に乗る際に焦ったため四頭が逃げて全速力で走り去り、六人の下馬した騎兵が残された。コール大尉はそのうちの一人を鞍の自分の前に乗せ、騎兵たちはその例に倣った。こうして戦隊は動きを妨げられ、退却して射程外に出た後、再び失った馬を捕らえることに成功した。敵は騎兵隊が再び騎乗しているのを見て、丘に避難した。しかし、彼らの戦意が高かったのは明らかであった。

マルカナイの夜間攻撃の犠牲者は次のとおりであった……

イギリス軍将校

死亡――

W. E. トムキンス大尉 第三八ドグラ隊

A. W. ベイリー中尉 第三八ドグラ隊

負傷により死亡――

H. A. ハリントン中尉 第三八ドグラ隊付属

現地將校

負傷……………

――

現地兵

死亡

負傷

第八山岳砲兵中隊……

――

――

第三五シーク隊……………

――

三

第三八ドグラス隊……………

――

〇

ガイド歩兵隊……………

〇

――

その他……………

二

二

総犠牲者数

一六

／

そして九八頭の馬とラバ

一方、第三旅団はナワガイでの静かな夜を過ごしていた。しかし翌朝六時ごろジェフリーズ將軍のキャンプが攻撃されたというメッセージがランバト峠のバフ隊からヘリオグラフィで送られて来た／その激しい発砲は一晚中続き、犠牲者の中に数人の將校がいたのとこの。このニュースに全員が沸き立った。私たちが朝食をとっている間に、現地將校と第一ベンガル槍騎兵隊の一〇人のスワールが早くも到着して詳細を語った。マムンド族との六時間の戦闘……三人の將校が死亡、致命的負傷／一〇〇頭近い動物が撃たれた。この情報

の結果として、ピンドン・ブラッド卿はランバト峠通過の命令を取り消し、ジェフリーズ将軍にマムンド溪谷へ行き、部族民を徹底的に懲罰するよう指示した。

私は命じられた作戦を目撃するために、現地将校の護衛の下で第二旅団に戻ることを許された。私は鞍に乗せることができるものを慎重に選択し、最も重要なものは外套、チョコレート、齒ブラシであったが、すでに出発していた護衛の後を急行し、彼らが丁度ナワガイ峠を通過するときに追いついた。

最初の六マイルの間、道は網状の深い山峡を通っており、騎兵たちは非常に注意深く道を選んだ。小さなパーティーが攻撃されるとまずい場所であった。しかし幸運なことに、数人の武装部族民に出会ったものの彼らは私たちに発砲しなかった。ある地点でルートは前夜の襲撃者の一部が退却した深いヌラーを通っていた。これらはおそらくチャルマンガ溪谷に続いていた。彼らは明らかに損失を被っていた。負傷した男たちを運んだ現地のベツドがいくらか散らばっていた。おそらくこの場所で彼らは牛を見つけて乗り換えたのであろう。ようやく扱いにくい地面を通り抜け、ナワガイの平坦な平野に入ると、私たちは目をこらして旅団を捜した。谷を越えて七マイル離れたところに、長い茶色の筋があった。それは、マルカナイからマムンド溪谷の入り口まで行進する軍隊であった。五つの燃える村の煙が高い円柱のように空中に昇っていた。山に対しては青く、空に対しては茶色で。一時間の騎行で私たちは旅団の所に着いた。誰もが昨夜の出来事に夢中であった。そして全員が眠っていなかったせいですり減って見えた。「あなた方はヌラーから抜け出せてとても幸運だった」と彼らは言った。「もっと多くのことが起こるだろう。」

騎兵隊はすぐに追跡から戻った。彼らの槍の先は暗く血塗られていた。感謝を込めてニヤリと笑ったシーク兵に、あるスワールは誇らしげに武器を見せた。「何人？」あらゆる方向から質問が飛んだ。「二人」と将校は答えた。「しかし、やつらは闘志にあふれている。」

今や旅団はカルのカーンが所有するイナヤット・キラという名前の大した石の要塞の近くの空き地にキャンプすること、という命令が出された。これは言い換えるなら「グラント砦（*アメリカ西部でアパッチ族との戦いに使われた砦）」である。軍は行軍と前夜の戦いで非常に疲れていたが、敏速に塹壕を掘り始めた。キャンプに約三フィート半の高さの外壁を作る他に、誰もがガリガリと引っ搔いて自分のための小さな穴を作った。これらの仕事で午後が過ぎた。

バフ隊はランバト峠の頂上から行軍して日没時に入ってきて来た。彼らは夜の発砲音を聞いており、その場になかったことに失望していた。それは「単なる運」であった。一八九五年のチトラル遠征中、彼らはすべての会戦を逃すという不運を経験していた。今回も同

じである。全員が彼らを元気づけようとした。暗くなるやいなや攻撃の可能性が高くなった。

夕食後、キャンプの北にある大きなヌラーから銃弾が降って来るようになった。すべての照明が消され、テントは引き払われた。誰もが地面を掬ってスープ皿を置いていた場所へ退いた。しかし、攻撃は行われなかった。敵は友軍を通して政務担当官に、自分たちは疲れているのでその夜は休むだろうと伝えていた。彼らはキャンプを銃撃するため数人の「狙撃手」を送った。彼らは二時頃まで気まぐれな一斉射撃を続けた後、撤退した。

前夜に休息を奪われていた人々は銃撃にもかかわらず、すぐに眠りに落ちた。その他の疲労に圧倒されていない者たちには、自分の穴に横たわってじっと星たちを見つめる以外の仕事はなかった―ピカデリー・サーカスと同じくイナヤット・キラにも静かに輝くその公平な星たちを。